



～年間聖句～「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章17節

「親の在り方が、子どもの基準に」

親は、子どものために何かをしなければならないと感じるものです。何かを教え、先回りし、後れを取らないように常に気を配っています。学校の成績、習い事、まわりとの比較、そのどれもが頭から離れません。その結果、子どもと話す時の多くが、評価と心配で埋め尽くされます。子どもの1日をデザインする時、早めに始める、量を増やす、難しいことも与える、このような前提が頭に浮かびます。もし、少しでも空白があると親は不安になることもあります。

私たち教師は、学校で多くの子どもたちと接しています。私は、子どもに教えれば教えるほど、子どもの中で大事なものが削られていく感覚になることがあります。大人が良かれと思って加えたことが、子どもの世界を貧しくしている感覚です。大人が「してやっている」と感じていることほど、子どもの自然な成長を妨げているのではないだろうかと思うことがあります。なぜなら、子どもの心は大人の意図をとて感じ取るからです。実は、子どもは、ほめ言葉より先に、期待と焦りの感度を上げてしまうのです。

子どもは、外から教え込まれるときではなく、よく意味も分からないまま何かをじっと見つめている時が一番豊かな時間になっていると聞いたことがあります。大人が絶えず口を挟むと、その時間は細切れされてしまいます。そして子どもの心は、自分の興味ではなく、大人の表情の変化に慣らされていきます。

よく「親はただ座っているだけでいい」という話を聞きます。これは放置するということではなく、余計な意図を差し込まず、静かに同じ場所にいるということです。何かを教え込むということではなく、大人自身の心を整え、平静にしておくためにそこに座るということです。大人が平静な心で、ただ共にいる時、子どもは安心して目の前のことに集中します。

「親の在り方が子どもの基準になる」というのは、子どもは親の言葉より先に、親の在り方そのものを基準にして受け取っています。子どもは何が普通かを、説明ではなく、親の雰囲気から決めています。この親の在り方とは、立派な振る舞いをしろと言っているわけではありません。心の向きの話です。自分の心が、どの向きを向いているかのことです。自分の都合ばかりに向いていれば、子どもはそれが当たり前だと思うようになります。目の前のものごとに素直に敬意を向けていれば、それが当たり前というようになります。

私は数学の教員ですが、数学を教える時、教える側の在り方は生徒の基準になると思っています。正解を出すことだけを重んじる教師のもとでは、生徒は結果だけを気にするようになります。解くプロセスを大事にする教師のもとでは、生徒も途中の考え方を気にするようになります。

結局子どもは、評価より先に、「目の前の大人は、何を大事にしている大人なのか」を感じ取っています。

親も私たち教師も人間です。いつも落ち着いた振る舞いをしろと言われても無理な話です。腹を立てることもあるし、弱っている日もあります。大事なものは、その時の自分の心が乱れていると認め、乱れたままだまを正しい基準として見せないことだと思います。

こんな話があります。例えば、子どもがコップの水をこぼしたとします。親がその瞬間、顔をしかめて大きな声を出せば、「失敗＝怒りを呼ぶもの」という基準が刻まれます。逆に一呼吸おいて、淡々と片付けながら、どうすれば次はやりやすいかを一緒に考えれば、「失敗＝工夫のきっかけ」という基準が刻まれます。同じ出来事でも、大人の在り方が、子どもの世界の意味を変えます。